

## キクの摘心に対するオフシュートの利用に関する試験

西村和明・豆塚茂実

(大分県温泉熱利用農業研究所)

NISIMURA, K. and MAMETSUKA, S.

Studies on the utilization of the off-shoot for pinching of the Chrysanthemum

キク栽培において定植後行なわれる摘心はかなり面倒な作業である。そこで、この手摘みによる摘心にかわるものとしてオフシュートによる摘心効果について検討し、2, 3の知見を得たので報告する。

## 材料および方法

試験Ⅰ オフシュートの処理方法、処理部位のちがいによる摘心効果について検討した。供試品種は文明を用い、ガラス室で管理を行ない、10倍および20倍液を用いたのとおり処理を行なった。1区、噴霧器による全面散布、2区、上位葉への塗布、3区下位葉への塗布、4区、生長点部への滴下、5区、手による摘心とした(10, 20倍液とも同処理)。

試験Ⅱ オフシュートの処理濃度による摘心効果について検討し、オフシュートの10, 20, 30, 40, 50倍液を用い、金星、新金星を供試品種とした。処理は頂部への噴霧器による散布を行ない、摘心の良否、分枝性、生育、葉害等について調査した。

試験Ⅲ 品種によるオフシュートの処理効果の相異について10倍、および20倍液を用い、秋ぎく20品種を供試し、ほ場栽培で検討した。

## 結果および考察

試験Ⅰでは10, 20倍とも1区、2区、4区は顕著な摘心効果を示したが3区はまったく効果が認められなかった。草丈は2区が優れ4区が劣り、1区はその中間値を示し、1区、4区では草丈の伸長抑制の傾向が見られた。分枝数は処理区ごとに明確な傾向は見られなかったが、分枝長、最大葉の葉面積において、草丈と同様の傾向が認められた。下位葉への処理はまったく摘心効果を示さず、オフシュートは吸収、移行するものでなく直接軟らかい組織に作用するものと思われた。以上より、オフシュートの散布は頂部への部分的散布で充分のように考え

られる。試験Ⅱの濃度に関する試験では、10倍処理で100%の摘心率を示したが、20倍処理では金星で75%と処理効果の低下が見られ品種による相異が認められた。30倍処理では16.7%、40, 50倍処理ではまったく摘心効果を示さず、実用性は認められなかった。

以上より処理濃度は品種により相異が見られるが、10倍処理が適当と思われた(第1表)。

第1表 散布濃度に関する試験

品 種	処 理	摘心率 %	節 数	分枝数	分枝長 cm	葉 害
金 星	cont	100	9.1	4.7	11.5	
	10倍	100	9.9	6.3	11.8	有
	20	75.0	10.6	5.2	11.5	無
	30	16.0	10.6	4.8	8.7	〃
	40	0	—	—	—	〃
	50	0	—	—	—	〃
新金星	cont	100	9.5	5.3	10.3	
	10倍	100	9.7	7.0	9.5	有
	20	100	11.0	7.8	9.0	無
	30	16.0	8.0	6.0	10.5	〃
	40	0	—	—	—	〃
	50	0	—	—	—	〃

注) cont は手摘み

品種による処理効果の差は試験Ⅲにおけるほ場栽培での調査においても認められた。オフシュート散布により葉の褐変、伸長抑制等の葉害も認められたが、散布後の生育葉には障害はなく均一な分枝の発生が見られた。オフシュートの品種による処理効果の相異、散布後の生育、開花期および切花品質におよぼす影響などさらに試験の必要はあるが、手摘みによる摘心にかわり、栽培の省力化の1つとして、さし芽床での散布等によるオフシュートの摘心効果は有望と思われる。